

イスラエルへの「抵抗の証し」危機に パレスチナのオリーブせっけん

林みづき 国際 | 速報 | 中東

毎日新聞 | 2025/11/10 06:30 (最終更新 11/10 06:30)

有料記事 2143文字



ヨルダン川西岸地区からオンラインで取材に応じるモジタバ・トゥベレさん＝2025年10月10日、オンライン画面のスクリーンショットより

パレスチナの人たちは6000年もの間、オリーブの木を大切に守ってきた。生活の糧であるとともに、イスラエルによる占領への「抵抗の証し」だ。

そのオイルから生まれる優しいせっけん。無形文化遺産になっている産業だが、その将来が危ぶまれているという。

「子や孫のようにせっけんを愛し、一生をささげてきた。どうか力を貸してほしい」。オンライン取材に応じた現地の男性が窮状を訴えた。

添加物加えず、手作業で

パレスチナ自治区の一つ、ヨルダン川西岸地区の北部にあるナブルスでは、古くからオリーブせっけんが作られてきた。交易が盛んな都市としても知られている。



モジタバ・トゥベレさんが経営する工場で、完成したオリーブせっけんを包装する従業員＝トゥベレさん提供

モジタバ・トゥベレさん（56）の一族は400年以上にわたり、せっけんづくりのバトンを引き継いできた。

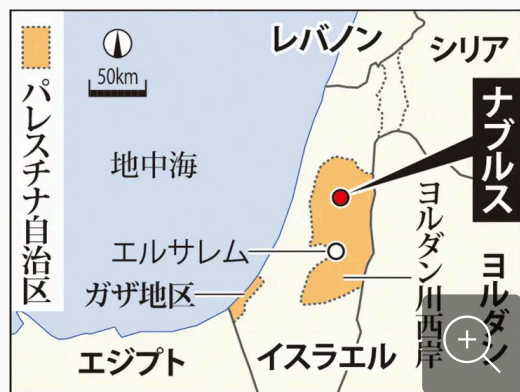
5、6歳の頃から家業を手伝ってきたトゥベレさん。今は職人や従業員ら30人を抱え、日本を含む72カ国にせっけんを出荷している。

手塩にかけて育てたオリーブから、食用のバージンオリーブオイルを抽出。これを原料として水や塩の化合物など天然の原料を加えて火にかけ、せっけんの形を整える。数カ月かけて乾燥させると、クリーム色のせっけんが出来上がる。

全て手作業で、添加物は一切加えない。「オリーブは私たちの象徴」。トゥベレさんは子どもや敏感肌の人も使えるせっけんを誇りに思ってきた。

ところが、最盛期の1980年代に42軒あった工場は今や、3軒しか残っていないという。

背景にあるのはイスラエルによる軍事占領だ。パレスチナ人の自由が奪われ、オリーブの栽培がままならない。オリーブの木が切り倒される被害も相次ぐ。



WEB1・ナブルス.eps

ヨルダン川西岸地区は67年、もう一つの自治区のガザ地区とともに占領され、パレスチナ人から土地を剥奪する入植地建設が年々拡大してきた。

パレスチナ人の移動は厳しく制限されている。イスラエル軍は幹線道路などで検問所を設置。この数年は積み荷や乗員を厳しくチェックするようになった。

国連人道問題調整事務所（OCHA）によると、ヨルダン川西岸地区内の検問所やゲートは2025年2月現在で、849カ所にも上っている。

「オリーブの収穫期には畑の周辺に検問所が作られ、畑にたどり着けない生産者が大勢いるんです」。トゥベレさんは苦い表情を浮かべる。

検問所で3～5時間、銃を向けられることも

トゥベレさんによると、普段なら自宅から工場まで車で20分くらいでも、検問所で3～5時間待たされることもざらだ。

オリーブの栽培や工場の稼働ができない日もあるという。そもそも検問所が閉鎖され、通行できない日もある。

今年5月、トゥベレさんは理由が分からないまま、イスラエル兵から銃を向けられることがあった。検問所の通過は時に命がけだ。



イスラエル側が設置した検問所の近くでは、渋滞が頻繁に起きている＝パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区のナブルス近郊で2025年10月9日、モジタバ・トゥベレさん撮影

水や電力の供給もイスラエル当局に管理されている。オリーブ栽培やせっけん作りには、これら全てが足かせとなってくる。

おのずと、摘み取ったオリーブやせっけんの輸送に時間がかかってしまう。それに伴ってコストも上がってしまい、経営を圧迫しているという。

国際司法裁判所（ICJ）は24年7月の勧告で、移動の制限は「人種、宗教、民族にもとづく制度的差別」と指摘している。

「誰でも殺そうとしてくる」

パレスチナ市民への暴力も後を絶たない。ヨルダン川西岸地区ではこの2年間で、パレスチナ人1001人が殺害された。うち213人は子供だ。

暮らしそのものが脅かされ、トゥベレさんは不安で仕方ないという。

「イスラエル兵や入植者らは、何の理由もなく誰でも殺そうとしてくる。市民が不当に拘束されたとも聞く。これまでの人生でこんなに危険を感じたことはなかった」

そして、傷ついたガザ地区に思いをはせると、心が痛む。

トゥベレさんがせっけんを売ってきた40年来の知人男性は、生後2週間の赤ちゃんを含む孫2人と義理の娘を失ったという。

オリーブの収穫期は10～11月。いつもなら一族が集まり、食卓を囲んでお祝いをするのがパレスチナの習わしとなっている。

ただ、今は違う。「ガザを思い、悲しみに暮れている。この時期の喜びは奪われてしまった」

「ガザ再建に力を貸してほしい」



モジタバ・トゥベレさんが製造し、日本で販売しているオリーブせっけん＝さいたま市で2025年10月2日午後3時24分、林みづき撮影

6000年以上も前からパレスチナ人によって栽培されてきたオリーブ。トゥベレさんがいるナブルスのせっけん作りは24年、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された。

自由に栽培できない苦境に加え、今年は不作の「裏年」に当たり、収穫量が減ってしまうことが見込まれるという。

それでも、トゥベレさんの覚悟は変わらない。占領への「抵抗」としてせっけんを作り続けるとし、現地の

の今を訴えた。

「ガザのジェノサイド（大量虐殺）を全世界が目撃しているのに、止められなかった。今度こそ停戦を実現し、私たちの土地を返してほしい。そして、日本の皆さんには私たちの生活や街の再建にどうか力を貸してほしい」

トゥベレさんのオリーブせっけんは、日本の販売代理店「YOUR ORGANICS」公式サイト (<https://yourorganics.shop/>)で購入できる。【林みづき】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagrophy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.